

# 西遊夢錄

(十七)

## 瀧川 規 一

### XVIII 蘇國の部 エデンバラ市及び郊外

【ケノンゲート教會と墓地】旅足を急がせてケノンゲート (Canongate) の大通りの傾斜道を降り登りしつゝメリ女皇と幾度か交渉をもつたモレイ伯の館 (Moray House) を外から眺めつゝ所謂ケノンゲート教會裏の墓地に行く。この墓地には蘇國詩人のフアガソン (Robert Ferguson) が永く眠つて居る。フアガソンは人も知る如く蘇國に於ては詩人ラムセイ (Ramsay) から詩人バーンズ (Burns) に至る詩系の連鎖をなす人である。バーンズは彼の爲めに追念の一句をものして彼が病弱の身をもつて苦しき生涯を送つた悲運を追懷して居る。フアガソンの詩の是非善惡は或は評家等によつて一致せざる點も多々あらうが兎に角蘇國の一詩人として忘る可からざる人である。餘り大ならざる彼の墓石はバーンズの建立したものであると云ふので米國あたりから旅客が屢々訪れて來る。この墓地にはまた有名なる富國論 (The Wealth of Nations) の著者 Adam Smith も亦靜かに眠つて居る。墓域廣からずと雖も幾多の墓碑を仔細に點檢するとき其他にも

讀書子の知人を見出すこと二三にして止まらないであらう【セイント・チャイルス寺附近】墓地を去つてケノンゲート・トルブース (Canongate Tolbooth) の家に行く。今は一部分改築され壁に附けたる銘刻によつて其跡を知るのみであるが、文豪スコットの小説ザ・ハート・オブ・ミッドロシアン (The Heart of Midlothian) を讀んだ人々にとつてはその牢獄は第一印象として記憶に留まる。抑も Tolbooth の語の Tol は賦課金の意であり booth は緣日の『出し店』の意である。緣日に店を出すものは何處の國にもあるやうに相當の金を仲間に必要なければならぬ。蘇國に於ても緣日に『張り店』を出さんとする者は賦課金を徴收された。而してその規則を破つたものは拘留に處せられた。これからトルブースの語は都會にある牢獄の意に用ひられた。蘇國では他の都會にもこのトルブースの名のついた牢屋がある。例へばセルカーク (Selkirk) の町にもある。この名の附いた牢獄中最有名なのは今訪問したエデンバラ市のトルブースである。知人の蘇人ば上述のスコットの小説を説いてトルブースの外觀だけなりとも見物せよと薦める。トルブースの傍にはセント・ジャ

イルヌスの伽藍 (St. Giles's Cathedral) がある。

この伽藍は歐大陸で見るとやうな堂々たる伽藍ではない。伽藍そのものは兎も角として世人の注意を惹くのは堂内にあるロバート・ルイス・ステヴァンソン (Robert Louis Stevenson) の像である。遺骸は現在新西蘭委任となつて居るサモア島のグアエア山 (Mt. Vaea) 上に葬られて太西洋上の温風に浴し海洋の文學を永久に且つ現實に味つて居るのである。ステヴァンソンがエダンバラ市のホリアード・プレイス (Howard Place) の八番地に孤々の聲を擧げ、蘇國の法廷にバリスダとして辯護士になるまで常に書類の包を小腋にかかへて出入したと云ふ法廷も、蘇國人が涙と血とをもつて議會を組織し遂には英國議會に合併されるに至るまで幾多の悲喜を交錯せしめた議事堂の建物もこの伽藍の側にある。刺を通じ適當の紹介を得て議事堂の案内を乞ふならば案内の任に當る蘇人は蘇國がスツアート王家に支配されし當時から説き起して英蘇合併に至るまでの紛糾を極めたる政治史の纏れを理路整然と鮮かなる英語で説明して呉れる。一應説明が終るとこゝもと得意の壇上は將にこれーと云はんばかりの姿勢をとつた後、五十歳前後の案内役の紳士は淋しき笑を肥え太りたる赫顔に漂へ遙か英蘭の空に向つて嘯く。蘇國の歴史を回顧する者にとつては一抹の悲愁の感なき能はずである。政治家に非らず一國の思潮を支配する思想家にもあらざる旅の身にも貰ひ受ける同情的悲愁を感じずには居られなかつた。

【エダンバラ城】 カルトン丘 (Calton Hill) に登りエダン

バラ市を下瞰した後、程遠からぬエダンバラ城の入口まで坂道を疲れた旅足をひきづりながら登る。城門の嚴めしさに或は追つ拂ひを喰ふのではないかと心こわく歩を進める。受付にて國籍と兵籍の有無とを質問されたが他に何のこだわりも無く入城を許される。邦人なるが故に特別の説明をなし日本に背つて旅した時非常の好遇を受けたことがあつたとて虚々握手を求める者すらあつた。

蘇國王の王冠や權票の輝やかしいものを一瞥し、ゼームス一世が生れたと傳へられるメリ女皇の御部屋を覗き、城壁上にある巨砲モンス・メッグ (Mons Meg) を見る。この巨砲には史實として幾多の城塞を陥落降伏せしめた誇がある。一四五五年に蘇國のトリッヅ城 (Trieve Castle) を陥落せしめ一四九七年にはノルハム城 (Norham Castle) を降伏せしめた。その他何々と夥多の軍功を誇るのである。

さても何故にこの巨砲にモンス・メッグと云ふ名がつけられてあるか。その語義に至つては蘇人と雖も確定的に答へることが出来ない。十五世紀にフランダーズ (Flanders) の一都會モンス (Mons) で鑄造されたのでモンスの名稱を附してあるのだらうと蘇人は言葉尻を濁す。このモンスは世界大戦の當初に獨軍と激戦のあつた處である。また十五世紀に鑄造された巨砲をメッグ若くはマッグ (Meg) と云つた。その語義は亂暴娘の意である。最近自動車會社のフォードが自動車にリッツィイ (Lizzie) と女性の名を附けて居る。製造品に女性の名を附けることは別に怪しむに足らないと知人の蘇人

は云つて居る。最近傳へ聞く處に依ればこのメッグ嬢が全市を睥睨してゐる附近に一大記念塔が大戦に戦死した者の靈を弔ふ爲めに建立されたと云ふ。城壁上に立つて四圍の民家を下瞰する時成程蘇人のお自慢の種となる丈けの巨城であることな首肯せしめられる。夕陽漸く傾かんとする頃城を立ち去らんとすれば城内の一隅に女の聲がする。男で固めてゐる可き筈の城内に異性の聲はそも何事かと好奇心をそゝらして近づく。こゝは蘇國であつて日本の兵舎でないことにはじめて気がつく。兵舎には幾多の軍人の家族が住んでゐる。濃皮の剥けた白肌の女性や娘などが嬉々と群れ遊んで居る。異邦人を物珍らしげに室の窓から覗いて見てゐる者もある。こゝに至つて大砲をメッグ(亂暴娘)と名をつけても滿更竹に木を繼いだ程の不思議でもなさうに感じた。

城を辭してエザンバラは目貫きのプリンス街 (Princess Street) に出てその東西の庭園 (East and West Princess Street Gardens) を黄昏時に散策する。いづれも同じく初春の夏心地を味ふ若き旅行者の群に賑うて居る。

【國立畫像展覽場】 日な改めて國立肖像畫展覽場 (The Scottish National Portrait Gallery) と蘇國々立美術館 (The National Gallery of Scotland) とに至る。倫敦にある同種の展覽場は世人の喧傳する有名なものであるが、その展覽場に入つた時暗々裡に意識したのは一體斯うした繪を見て何に興味を感じず可きかと云ふことであつた。出品数が餘りに多きに過ぎて一度や二度の訪問ではどこにどの特徴があるかまたどんな繪がよいのか判らない。餘りに博愛心を發揮してどの

繪も好きだなどと云はうものなら人は直に鑑賞力を疑ふであらう。さりとて展覽されてゐる品が果して名品であり眞品であるや否やをどうして判定し得やう。個々の出品に附屬せる説明によつて直に感心する人もある。然しそれは自らを蔑視したことになる。だからルーカス (Lucas) が倫敦訪問記 (London Visited) に云つてゐるやうに展覽の品を一々鑑賞するよりもそのうちの目星しいものを鑑賞するのが素人のすべきことであると思へる。全出品中どれが最良の作品であるかなどと云ふやうな質問は愚の至であるとなれば、泥んやどの品が最高の價值を有するかなどの質問も亦價值のない質問である。結局はどの繪が好きであるかと云ふ好惡の問題となる。さうなれば問題は簡單である。これは専門家ならぬ自分が繪畫美術品の展覽場を一覽する時常に抱く感である。今第一に肖像畫展覽場に足を踏み入れる。自ら繪畫展覽場とは全く異つた感が起る。個々の作品に藝術的價值がありや否やまた眞實如何との問題が左程第一義とはならない。これに反し史上若くは文學上にてお馴染の類がずらりと時代を追つて吾を待ち顔に並んでゐると云ふことに一入の興味が湧く。さうなると作品の藝術的價值などは問題でなくなる。

先づ十六世紀の肖像畫の室に入る。セームス一世から五世 (一三九四—一五四二年) に至るまでの五人の國王が並んで居る。何れも非運な王様ばかりで、或は殺害されたり戦死をしたたり暗殺されたり絶望の餘り悶絶したりしてゐる人々である。文學研究者にとつて殊に親しみを感ぜしめるのは詩人である

セームス一世である。次に面白いのはセームス四世にからまる傳説である。セームス四世は父王に反對する謀叛に加擔をした嫌で、その贖罪として終生鬚を剃らね約束であつた。然るにこゝに掲げられたセーム四世の像は綺麗に鬚を剃つてゐる『はて變だ』と思はせる。然し王様は鬚を剃つた翌日丸々と肉附きのよい若い婦人マーガレット・チユードア(Margaret Tudor)と結婚して御座る。結婚の前日久し振りに鬚を剃つたうれしい處を寫實的に寫したのではないかと思ふと思ひなしか王様は額縁の内であつたうれしうな顔をしてゐるやうにも見える。見れば隣にはマーガレット皇后がやはりうれしうな顔をして侍つて御座る。史家の教へる處ではセームス四世のこの像は一五〇三年に出來上つて居るからこの時國王は三十歳で皇后は十四歳であつたと云ふ。然るに筆者はそれより後代の人であるから皇后を見る機會がなかつた筈であると云ふ。そんな史實を攻究する暇もなく蘇國女皇中最有名なメリ女皇の時代に入ると既にホルルド宮殿に就いて述べた人々が毀譽褒貶ば觀者に委かすと云はんばかりの顔をして重んでゐる。何と云つても水際立つて人の注目を惹くのはメリ女皇である。女皇は白衣を纏うてゐる。これは一五六〇年から一五六一年までの間であつて佛王フランソア二世(Francois II)の寡婦として喪服を附けてゐるのである。種々の材料の上に種々服裝を異にして描き出されて居る女皇の姿は變化多き一生を物語つてゐる。佛蘭西で華やかな樂しの夢を見て憂世の苦勞を知らぬ二十歳足らずの妙齡の娘時代から英蘭の牢獄に

憂目を送つた十九ヶ年の苦難の終に、まで移り變り行く彼女の姿を見る時觀者は坐ろに人生の悲痛を感じさせられる。當時の人々の書を遺した記錄に依れば白衣を纏へる頃の女皇の顔の白さは顔を蔽へるヴェールの白さよりも白くあつたと云ふ。また英蘭へ走つて數ヶ月を経た頃のことであるが、英蘭では彼女を臣下に見せるのが危険であることまで云はれた。その理由としては女皇は人柄として親切な性質をもち接する人々を魅了する優雅なその舉措態度に自ら表はし蘇國訛りを口にするが温和の衣に包んだ鋭い頓智を發揮するからだと言はれてゐた。また刑場の露と消えんとする女皇の姿を目撃した樞密院書記の報告が果して正確であるとするならばその時女皇の眼の色は茶褐色であり頭髮は既に雪白であつたと云ふ女皇の頭髮と眼の色とは赤い鬚むしやの(Red Tod)の王様と部名された父王の容色を受け繼いだらしい。

女皇を中心人物とする劇の序幕として缺く可からざる人物は高僧のビートン(Beaton)である。ビートンの近くにはその手に掛つて殉教の犠牲者となつたウィイシャート(Wilhart)が居る。この兩人は既に述べた如く蘇國に於ける宗教改革の運動に先驅を勤めた敵と身味の大立物である。改革運動の本舞臺に入つてジョン・ノックス(John Knox)が居る。次代に入つて蘇國のプレスビテリアン派と英蘇同盟とが成功した時の代表者として二人の監督教會派の大僧正が居る。然るにメリ女皇をしてその舞踏姿を悦ばしめたと言はるゝ國王ダニールの姿はどうしてか何處にも見えない。これに反し陰險なる

手段を辭しなかつたボスウエル (Bothwell) が居る。女皇と婚するが爲めにボスウエルが離婚を追つた妻は小照中に納つて愛らしい顔を見せてゐる。ノックスが蘇國唯一の政治家であると言つた攝政のモレイ (James, Earl of Moray) は此處に姿を見せて居ない。その代りに次代の攝政等が数人並んでゐる。女皇時代の陳列室こそ觀者をして當時の活劇を目前に見る心地をせしめるのである。

一六〇三年の英蘇兩王家の合同時代になるとセームス六世が英蘇兩國の王となり賢明なる國王として賞揚されてゐる丈けあつて、非常に賢いさうな几帳面な顔付をしてゐる。國王が四五歳の小兒であつた頃の畫像と未だ蘇國丈けの君主であつた頃の肖像とを照合するに兩者を通じて眞面目な様子が窺はれる。その周圍には當時の學者政治家及び藝術家等がずらりと顔を並べて居り何れも平和の時代の代表者である。

## 講話

### 岩石學用顯微鏡の使用法 (五)

小 川 琢 治

#### 六、直交ニコルによる検査(續)

(四)複屈折の測定 前に述べた方法はレブナー氏の複屈折圖に示す複屈折の知れた鑛物の最高の干渉色に據りeを見積り、同じ薄片中の他の結晶斷面の干渉色を此の厚さの線上にて求むればよい。一例を示せば拉長石が黄色と黄灰色との中間の干渉色を示すならば、その厚さは約〇・〇三六耗と見積り得べく、同じ薄片中にて紫蘇輝石が橙黄色を呈するならば、その $n_p - n_g$ は約〇・〇一二